第54回 日本視能矯正学会

一般講演

エゴグラムからみた視能矯正専攻学生の成長過程
—1年次と4年次のエゴグラムの比較—

難波 哲子^{1), 2)}・小林 泰子^{1), 2)}・山下 力^{1), 2)}・田淵 昭雄¹⁾

¹⁾ 川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科

²⁾ 川崎医科大学 眼科学教室

Growth of Orthoptic Students After a 4-year Course Evaluated by
Egogram
-Comparison Between the First -and Fourth-Year Results of Egogram

Tetsuko Namba^{1), 2)}, Yasuko Kobayashi^{1), 2)},
Tsutomu Yamashita^{1), 2)}, Akio Tabuchi¹⁾

¹⁾ Department of Sensory Science, Faculty of Health Science and Technology, Kawasaki University
of Medical Welfare

²⁾ Department of Ophthalmology, Kawasaki Medical School

要 約

【目的】 同一学生の1年次と4年次の自己状態の変化を検討する。

【対象および方法】 調査対象は平成20年度～平成22年度視能矯正専攻入学生のうち89名（女性83名、男性6名）、平均年齢は1年次が18.4歳、4年次が21.3歳であった。調査方法は、新版東大式エゴグラムⅡ®（TEG）を用いて、1年次は5月、4年次は実習終了後の7月に説明後同意の得られた学生に集団で行なった。

【結果】 TEGの各項目尺度別平均値は、1年次、4年次の順に、支配的親（CP）は10.1、9.9、養育的親（NP）は14.6、15.6、成人（A）は8.9、9.7、自由な子ども（FC）は12.7、12.8、順応した子ども（AC）は14.1、14.8であり、1年次に比べて4年次には「NP」が有意に高くなっていた（ $p<0.05$ ）。1年次、4年次ともに「NP」と「AC」が高く、「CP」と「A」が相対的に低いN型を示した。基本的構え（OKグラム）では、1年次、4年次ともに自己否定・他者肯定型が多かった。TEGパターン分類で最も多いのは、1年次ではAC優位型が25名（28.1%）、4年次ではN型Ⅰが18名（20.2%）であった。

【結論】 視能矯正専攻における態度育成の教育では、1年次からもっている、医療職に必要とされる

別冊請求先（〒701-0193）岡山県倉敷市松島288

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 難波哲子

Tel. 086 (462) 1111 (内線54089) Fax. 086 (463) 1473

E-mail : namba@mw.kawasaki-m.ac.jp

Key words : エゴグラム、OKグラム、視能訓練士教育、自己状態、性格特性

Egogram, OKgram, orthoptic education, ego state, personality trait

「NP」を高値に保ち続けると同時に、成人の「A」が高く機能するように育つよう教育的配慮の必要性が示唆された。

Abstract

【Purpose】 A group of orthoptic college students were evaluated at the first and fourth years to investigate changes in their ego state.

【Subjects and Methods】 Subjects were 89 college students (83 females and 6 males) who enrolled in the orthoptic course between 2008 and 2010. The mean ages were 18.4 (first year) and 21.3 (fourth year). Using the Tokyo University Egogram II® (TEG, New Version II), the subjects were evaluated in May of the freshman year and in July of the senior year after they had completed the training program. All the subjects were evaluated as a group and informed consents were obtained.

【Results】 The average scores (in the order of 1st and 4th years) of the five scales of TEG II were: 10.1 and 9.9 for Critical Parent (CP), 14.6 and 15.6 for Nurturing Parent (NP), 8.9 and 9.7 for Adult (A), 12.7 and 12.8 for Free Child (FC), and 14.1 and 14.8 for Adapted Child (AC). The “NP” score of the fourth year was significantly higher than that of the first year ($P < 0.05$). While the “NP” and “AC” scores were high in both the first and fourth years, the “CP” and “A” scores were relatively low and this indicated a “N” type. As for the basic attitude (OK gram), self-denial and other-affirmation types were common in both the first and fourth years. The results of the TEG pattern classification showed that AC dominant type and N type I were the most common types for the first year (25 students, 28.1%) and the fourth year (18 students, 20.2%), respectively.

【Conclusion】 To cultivate a nurturing attitude in orthoptic students, special considerations should be given to the college education for the students to retain a high “NP” score, which is high in the freshman year and essential for the medical profession, and to achieve a higher “A” score at the same time.

I. 緒言

視能訓練士教育では、基本的知識や技術・技能に加えて、医療人としての人間性や倫理観、責任感、コミュニケーション能力などの情意領域の教育が重要視され、講義や演習をはじめ、学内実習および臨地実習で多くの時間が費やされている¹⁾。大学の4年間は、学生にとって新たな基礎教育と専門教育を身につけ、自己成長のための貴重な時期といえる。その過程の中で、学生の自我状態^{2)~4)}および対人関係の基本的構え^{5), 6)}がどのように変化するかを把握することは、医療人の養成課程、および青年期の成長過程において大切である。また、学生教育の評価あるいは学生のメンタルヘルスの評価^{7), 8)}においても意義がある。私どもは、視能訓練士教育の領域において、新版東大式エゴグラムⅡ®を活用し、臨地実習の指導者評価および学生に

よる自己評価の関係、学生の自我状態と対人関係の心構えの変化を検討して、学生自身の自己理解などに役立ててきた⁹⁾。

今回、同一学生の1年次と臨地実習終了後の4年次の自我状態と基本的構えの状態およびその変化を捉え検討したので報告する。

II. 対象及び方法

1. 調査対象

対象は、平成20年度～平成22年度入学の川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻学生のうち89名（女性83名、男性6名）、年齢は1年次が18.4歳±0.5歳（18歳～20歳）、4年次が21.3歳±0.5歳（21歳～23歳）であった。

2. 調査方法

調査方法は、新版東大式エゴグラムⅡ®

(Tokyo University egogram : TEG) を用いた。調査時期は、1年次では視能矯正専門科目の第1回講義後の5月、4年次では視能臨床実習終了後の7月に説明後同意の得られた学生に集団で行い回収した。

1) 新版東大式エゴグラム® II (TEG) ⁴⁾

東大式エゴグラムは、米国の精神科医エリック・バーン (Eric Berne) の交流分析理論に基づき、弟子のジャック・デュッセイ (Jack Dusay) が自我状態を量的に表現するためにエゴグラムを考案して、それをもとに東京大学医学部心療内科で多変量解析により開発した質問紙法心理検査である。TEGは自我状態に気づき、自己分析するためのツールであり、自己成長を促したり、対人関係における行動様式を考える上で活用される。TEGは、自己の5つの自我状態、支配的親 (Critical Parent ; CP)、養育的親 (Nurturing Parent ; NP)、成人 (Adult ; A)、自由な子ども (Free Child ; FC)、順応した子ども (Adapted Child ; AC)

を視覚的に把握し、客観的に自己分析する人格検査である (図1)。すなわち、①約50の質問からなる自己記入式の質問紙に、「はい」：2点、

図1 東大式エゴグラム (TEG) の5つの自我状態
P: 親の自我状態、A: 大人の自我状態、C: 子どもの自我状態、CP: 支配的親、NP: 養育的親、A: 成人、FC: 自由な子ども、AC: 順応した子どもを示す。

資料1 TEGパターン分類

(野村 忍：TEGパターン分類の作業手順。東京大学医学部心療内科 TEG研究会編：新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン。50-51, 金子書房, 東京, 2006. を引用)

「どちらでもない」：1点、「いいえ」：0点とする3件法で回答する。②得点を尺度ごとに20点満点で合計点数化して棒グラフを作成し、パターン化する。TEG検査により得られた尺度得点をもとに、東京大学医学部心療内科TEG研究会によるTEGパターン分類の手順にしたがい、19パターン29型に分類する⁴⁾(資料1)。③パターンにより性格・行動のあり方を測定し自己分析する。また、各尺度得点をスケールの同数字の位置にプロットする。プロット同士を線で結び、描かれた折れ線グラフよりTEGエゴグラム曲線を作成する。なお、エゴグラムの各要素については表3の参考付表の通りである⁴⁾(表3)。

2) TEGの5つの尺度の読み方

TEGは5つの尺度の得点が高い・低いによって解釈して、CPとNP、FCとACとの関係など他の尺度との相対的関連を理解することが重要である。また、それぞれの尺度がその人の行動パターンの主役を担っていると考えられる。したがって、実際の読み取り方は、一番高い尺度はどれか、次に高い尺度はどれかというように順番をつける。そして、エゴグラムパターンの一覧表を見て、最も高いパターンを同定する。

3) 対人関係の基本的構え

基本的構え(OKグラム)では、エゴグラムにおける下位尺度得点間の比較基準を設けて4つの類型に分けた^{2), 5), 7)}。4つの類型とは、自分自身が自己及び他者を肯定ないし否定するという観点から、“I'm OK – I'm Not OK”軸と“You're OK – You're Not OK”軸という2軸が交差してできる4象限に位置するエゴグラム

図2 基本的構えの4種類
(スチュアート・ジョインズ²⁾が表したものと新里他⁵⁾を参考にして改編)
不等号は、2軸を構成する尺度の優劣関係を表す。

個人特性である。基本的構えの4類型は、2軸4象限の第1象限である自己肯定・他者肯定型(I'm OK : You're OK、自他肯定型)、第2象限の自己肯定・他者否定型(I'm OK : You're Not OK)、第3象限の自己否定・他者肯定型(I'm Not OK : You're OK)、第4象限の自己否定・他者否定型(I'm Not OK : You're Not OK、自他否定型)として表される(図2)。それぞれの基本的構えの特徴として、自他肯定型は自他の尊重による民主的で前向きな構え、自他肯定・他者否定型は自己愛的で排他的な構え、自己否定・他者肯定型は自己犠牲的で劣等感を伴う構え、自他否定型は虚無的で不毛な構えが想定される^{2) 5) 7)}。

3. 分析方法

統計処理は、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いて、有意水準5%未満を有意差ありとした。

4. 倫理的配慮

検査に先立って、学生に自我状態を検討し、今後の実習指導等の基礎資料としたい旨を説明

表3 参考付表 エゴグラムの各要素

CP ; 目標が高く理想を追求し、自分にも他人にも厳しい。基本的には他者否定の構えを有する。
NP ; 他人をいたわり、親切で寛容な態度を示す。基本的には他者肯定の構えを示す。
A ; 事実に基づき、物事を客観的かつ論理的に理解し判断しようとする。他の自我状態の調整役でもある。
FC ; 感情や欲求を自由に表現する自我状態である。本能的、自己中心的で好奇心、直感、創造力と関連性がある。基本的には自己肯定の構えを有する。
AC ; 周囲に適応していく従順な自我状態である。親の嫉や教育の影響を多分に受けている。基本的には自己否定の構えを有する。

(野村 忍：エゴグラムの解釈、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会編：新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン、19-23、金子書房、東京、2006。を引用)

した。趣旨説明とともに調査協力を依頼し、同意と協力の得られた学生から回答を記入した用紙を回収した。結果については集団を対象とした量的分析を行なうため、個人データとして取り扱わないこと、目的以外には使用しないことなど、個人情報保護への配慮を十分に説明した。エゴグラム変化の結果は、個人票を作成して学生に返却することを伝え、記名式を採用した。なお、本研究は、川崎医療福祉大学倫理審査委員会で承認（承認番号397）を得たうえで行なった。

Ⅲ. 結果

1. 1年次と4年次のTEGの尺度別平均値の比較

表1に示す通り、TEGの各項目尺度得点の平均値±標準偏差は、1年次、4年次の順に、「NP」、「AC」、「FC」、「CP」、「A」の順に高かった（表1）。1年次に比べて4年次で平均値が増加した項目は、NP、A、FC、ACであり、平均値が減少した項目はCPであった。TEGの各項目尺度得点の平均値では、1年次に比べて4年次のNPは、有意に高くなっていた（ $p<0.05$ ）（図3）。しかし、NP以外の項目では有意差はなかった。TEGパターンは、1年次、4年次ともにNPとACが同程度に高く、CPとAが相対的に低いN型を示していた。

2. 対人関係の基本的構えの変化

1年次と4年次における対人関係の基本的構えは、自他肯定、自己肯定・他者否定、自己否定・他者肯定、自他否定の4つの型に分類した結果、図4の通りであった（図4）。基本的構えの人数は、1年次、4年次の順に、自他肯定型では14名（15.7%）、18名（20.2%）、自己肯定・他者否定型では12名（13.5%）、6名（6.7%）、自己否定・他者肯定型では51名（57.3%）、57名（64.1%）、自他否定型では12名（13.5%）、8

図3 1年次と4年次の自我状態の比較

----- 1年次、—— 4年次、n=89

* $p<0.05$ を示す。Wilcoxonの符号付き順位和検定

図4 基本的構えの人数

■は1年次、■は4年次を示す。1年次、4年次ともに自己否定・他者否定型が最も多い。

名（9.0%）であった。1年次、4年次ともに自己否定・他者肯定型が最も多く、1年次よりも4年次には更に増加した。4年次には他者を肯定する人数が多くなり、反対に他者を否定する人数は減少した。

3. 1年次と4年次のTEGパターン分類の比較

TEGパターンは、19パターン29型に分類した後、該当する人数を集計して、1年次と4年次の差の大きい順に並べた（表2）。1年次のTEGパターンでは、AC優位型、NP優位型の順で多く、全体の39名（43.8%）を占めた。次いで、N型I、FC優位型が多く、この

表1 TEGの尺度別平均値

	CP	NP	A	FC	AC	合計
1年次	10.1±4.3	14.6±3.9	8.9±4.8	12.7±4.5	14.1±5.0	60.3±10.8
4年次	9.9±4.0	15.6±3.8	9.7±4.6	12.8±4.8	14.8±5.0	62.9±11.9

平均値±標準偏差

表2 1年次と4年次のパターン分類比較

	パターン	1年次		4年次		1年次と4年次の差	
		人数(名)	%	人数(名)	%	人数(名)	%
1	N 型 I	10	11.2	18	20.2	8	9.0
2	N 型 III	2	2.2	10	11.2	8	9.0
3	N 型 II	4	4.5	10	11.2	6	6.7
4	M 型	3	3.4	5	5.6	2	2.2
5	A 低 位	3	3.4	5	5.6	2	2.2
6	U 型 I	0	0.0	2	2.2	2	2.2
7	C P 低 位	1	1.1	2	2.2	1	1.1
8	台 形 型 I	0	0.0	1	1.1	1	1.1
9	U 型 III	0	0.0	1	1.1	1	1.1
10	逆 N 型 II	0	0.0	1	1.1	1	1.1
11	P 優 位	0	0.0	1	1.1	1	1.1
12	W 型	3	3.4	3	3.4	0	0.0
13	平 坦 型 I	2	2.2	2	2.2	0	0.0
14	N P 低 位	1	1.1	1	1.1	0	0.0
15	A C 低 位	0	0.0	0	0.0	0	0.0
16	台 形 型 II	0	0.0	0	0.0	0	0.0
17	台 形 型 III	0	0.0	0	0.0	0	0.0
18	平 坦 型 II	0	0.0	0	0.0	0	0.0
19	平 坦 型 III	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20	逆 N 型 I	3	3.4	2	2.2	-1	-1.1
21	F C 低 位	2	2.2	1	1.1	-1	-1.1
22	逆 N 型 III	2	2.2	1	1.1	-1	-1.1
23	C P 優 位	1	1.1	0	0.0	-1	-1.1
24	U 型 II	1	1.1	0	0.0	-1	-1.1
25	C P 優 位	1	1.1	0	0.0	-1	-1.1
26	A 優 位	4	4.5	2	2.2	-2	-2.2
27	F C 優 位	7	7.9	3	3.4	-4	-4.5
28	N P 優 位	14	15.7	6	6.7	-8	-9.0
29	A C 優 位	25	28.1	12	13.5	-13	-14.6
	合 計	89	100.0	89	100.0	0	0.0

4パターンで全体の56名(62.9%)を占めていた。4年次のTEGパターンではN型I、AC優位型、N型II、N型IIIの順で多く、全体の50名(56.1%)を占めていた。次いで、NP優位型、M型、A低位型が多く、これら7パターンで66名(74.0%)を占めていた。1年次と4年次の変化の差が大きいTEGパターンは、AC優位型(-14.6%)、NP優位型(-9.0%)、N型I(+9.0%)、N型III(+9.0%)、N型II(+6.7%)、FC優位型(-4.5%)であった。

IV. 考按

視能矯正専攻学生が、状況の変化や対人関係を通じて自己をどのように捉え、変化しているかをTEGによって把握し、基本的構えについて検討した。その結果、TEGの特徴は、1年次、4年次ともにNPとACが高く、CPとAの低いN型を示し、自我状態の著変はなかった。N型TEGの特徴は、思いやり(NP)や協調性(AC)はあるが、専門知識を活用し価値判断す

る・責任をとる (CP) が低く、現状を把握し全体を統合して洞察する、事実を確かめて対応する (A) が低い傾向を示すといわれている¹⁰⁾。また、N型は思いやりや順応性があるものの、他者に合わせるように自己否定・他者肯定の傾向を示す¹¹⁾と考えられている。

「A」が低く「AC」の高いパターンは自己受容感が低く、自分に自信がなく、他人に対して心を開くことができないために不適応を感じやすいと報告されている¹²⁾。「A」が低位である、あるいは実習前後で変化がみられないのは、他の情報と組み合わせて総合的に判断することから、科学的根拠に基づいた総合的判断が困難なことから推察される¹³⁾。「A」が「FC」や「AC」より低い学生において、不安傾向が強くなり、外的刺激による影響を受けやすくストレスを生じる可能性が高い¹⁰⁾。梅津¹⁴⁾、武藤¹⁵⁾は、TEGについて自他肯定を示す成長・成熟した理想の医療職でみられる「への字型・ベル型」に近づけるため、「NP」だけでなく、低い自我状態「CP」、「A」、「FC」を高める教育が必要であると述べている。

自我状態「成人、考える私：A」は、事実に基づいて判断する、筋道をたてて考えるなどの思考力が育成されると高まる¹⁰⁾。この自我状態が高まっていくには、専門性に必要となる確かな知識・概念、価値づけ、役割と責任を引き受ける・引き受けさせる、行動規範が育つ必要があり、自我状態では「支配的親、価値づける私：CP」が働かなければならない。「CP」は、自他に対する支配的な厳しさを示すものであり、理想の追求という面がある。高かった1年次のCPスコアが、4年次に低下することは、教育の影響や生活の経験により、理想と現実が近づいたということが考えられる¹⁶⁾。一方、「CP」は自他に対する批判的な厳しさを示すものであるため、「価値づける私」を高めることが望ましい。

パターン分類では、1年次に他者に合わせる自我状態AC優位型がみられたが、4年次では思いやる自我状態「NP」を優位としたエゴグラムの傾向に変化した。日本人の平均的プ

ロフィールあるいは健全なプロフィールは、「NP」を頂点とする典型的な山型を示すと述べている¹⁷⁾。今後、視能矯正専攻学生の自我状態は、養育的親の自我状態「NP」を頂点とする「への字型」に近づけていく教育が必要である。

稲葉ら¹⁸⁾は高不安群のエゴグラムはN型でAは低い傾向にあるといい、外的刺激による影響を受けやすくストレスを生じる可能性が高いと報告している。本調査では、「A」が「FC」・「AC」より低値であることから、実際に即した対応がとりにくく、さらに、緊張・不安傾向になりやすい。したがって、予期情報の提供と時期を得た対処へのサポート等、「A」が機能しやすい配慮が1年次の当初から重要となることが示唆された。

実習における達成感を通してさらなる自己啓発への動機付けができれば、責任感、思慮深さ、思いやりなどの感性が育つものと考えられている¹⁹⁾。視能訓練士を目指す学生にとって、実習は身体的にも心理的にも緊張を強いられるが、最も成長を期待できる実践学習である。したがって、臨地実習においては、学生が患者や医療職者との関わりの中で、無意味に緊張したり、自尊感情を損なわないようなサポートのあり方が望まれる。さらに、自己を尊重できる人は、周囲の刺激や状況にむやみに動揺したり、過度に不安を感じることもなく、他者を尊重しながら現実を的確に認知し、適応しようとする傾向があると思われる。こうした能力は、視能矯正専攻学生が新しい臨床場面での自己の能力を最大限に発揮しながら学習体験を積み重ね、成長していく上で重要な要素となり、欠くことのできない資質であると考えられる。

本来、エゴグラムは生活習慣の変化や個人の意識の持ち方によって柔軟に変化するものである。各自我状態の行動や対人パターンは肯定的、否定的を併せもつため、一概に善悪を決めることはできない。むしろ、エゴグラム調査後の適切な個別の対応が必要になる²⁰⁾。

学生は、専門職としての知識や判断等が未熟な段階でN型であるが、今後、他人軸 (NPとAC) だけでなく、自分軸 (CPとFC) のバランスがとれた自他肯定を示す視能矯正専攻学生

の育成が望まれる。視能矯正専攻における態度育成の教育では、1年次からもっている、医療職に必要とされる「NP」を高値に保ち続けると同時に、成人の「A」が高く機能するように育つよう教育的配慮の必要性が示唆された。

謝辞

本研究は、平成24年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて行われた。本研究を遂行するにあたり、ご協力いただきました本学感覚矯正学科視能矯正専攻の学生にお礼申し上げます。また、実習受け入れ施設の実習指導者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 医療六法 (平成25年版): 視能訓練士. 1621 - 1645, 中央法規出版, 東京, 2013.
- 2) Stewart I, Joines V (深沢道子監訳): TA TODAY - 最新・交流分析入門. 実務教育出版, 東京, 1998.
- 3) Dusay J (新里里春訳): エゴグラム—ひと目でわかる性格の自己診断. 創元社, 大阪, 2000.
- 4) 東京大学医学部心療内科TEG研究会編: 新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン. 金子書房, 東京, 2006.
- 5) 新里里春, 水野正憲, 桂 戴作, 杉田峰康: 交流分析とエゴグラム. チーム医療, 東京, 2007.
- 6) 三野節子, 金光義弘: 大学生の対人関係の基本的構えと精神的健康との関係—交流分析におけるエゴグラムの類型化を通して—. 川崎医療福祉会誌 18: 418-484, 2009.
- 7) 志渡晃一, 志水 幸, 蒲原 龍, 宮本雅央, 早川明, 島谷綾郁, 他: 新入学生の対人関係の基本的構えと精神的・身体的自覚症状に関する研究. 北海道医療大看護社紀 14: 11-17, 2007.
- 8) 末松弘行, 和田迪子, 野村 忍, 俵里英子: エゴグラム・パターン—TEG東大式エゴグラムによる性格分析—. 金子書房, 東京, 1990.
- 9) 難波哲子, 山下 力, 田淵昭雄: 臨地実習指導者評価と学生の「自己客観的評価」との相関性. 日視会誌 38: 313-319, 2009.
- 10) 稲光哲明, 篁 宗一: エゴグラムからみた看護学生の成長過程—1年次と4年次のPCエゴグラムの比較—. 交流分析研 32: 73-80, 2007.
- 11) 武藤真佐子: 看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化. 北大医療技短大紀 12: 75-86, 1999.
- 12) 真下りか: 看護学生の自己理解の一助としてのエゴグラム. 交流分析研 28: 85-91, 2003.
- 13) 三木園生, 行田智子, 石原輝美, 生方尚絵, 中嶋 彩: 看護学生の自我状態に関する調査—1年次と3年次の比較—. 日看会論集 看護教育 32: 92-94, 2001.
- 14) 梅津靖江, 吉岡伸一: 看護学生と看護職の思いやり行動と自我状態の比較. 米子医誌 62: 91-102, 2011.
- 15) 武藤真佐子: エゴグラムからみた看護者の成熟性の特徴. 第26回日看会論集 看護管理: 30-33, 1995.
- 16) 任 和子, 豊田久美子, 中井義勝, 他: エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化. 京大医療技短大紀 健人間 9: 73-78, 1997.
- 17) 桂 戴作, 杉田峰康, 白井幸子: 交流分析入門, 99-108, チーム医療, 東京, 1996.
- 18) 稲葉佳江, 丸山知子: 看護学生の性格特性と自我状態の変化. 交流分析研 14: 9-16, 1989.
- 19) 白鳥さつき, 佐藤公美子, 比江島欣慎: 看護学生・医学生の職業適応と自我状態に関する研究. 医教育 35: 235-244, 2004.
- 20) 中川幸子, 森 恵美: 看護大学生のエゴグラムパターンの特徴—変化群と無変化群の比較—. 日赤看護大紀 7: 44-53, 1993.